ＩＳ ―過去より受け継がれし霊石（いし)―

IZUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　―過去より受け継がれし霊石（いし）―

【Ｎコード】

Ｎ１１８２Ｙ

【作者名】

ＩＺＵＭＩ

【あらすじ】

親の職場に社会見学、そこまではよかったが事故を引き起こしちまった。

作者が不器用なのでどうなるかわかりません。どうか暖かい目で見てください。

プロローグ：非日常への憧れ（前書き）

お手柔らかにお願いします。

プロローグ：非日常への憧れ

ＩＳ
正式名称『インフィニット・ストラトス』こいつは宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。
しかし『制作者』の意図とは異なり、宇宙進出は一向に進まず、結果としてはこのスペックを持て余した機械は『兵器』と変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた――飛行パワードスーツ――

それは中学三年の夏休みに起きた。
その時俺は、一人で両親の勤め先であったとあるＩＳ関連企業に社会見学という形で来ていた。
親の仕事を知ることは悪いことではない。社会見学だからと大人達は快く受け入れてくれた。
見学には広報の人が付いてくれた。ＩＳの構造や製造行程などを説明してくれた。最後には純国産のＩＳである『打鉄』を見ることが出来た。
「あの、これ触っていいですか？」
「ええ、それにしても残念ね、そんなにＩＳの事が好きなのに操縦が出来ないなんて」
「いいんですよ、動かせなくても武器の設計や本体の設計は出来ますから」
ちなみにだが、このＩＳという機械、重大な欠点がある。
「君が男の子じゃなければ動かせるのにね」
そういうことだ、簡単に言うと女性にしか使えない。
俺は男だから触れても何の反応もしない。このまま一生こいつらに関わることは無い可能性もある。そう思いながら触れた。

簡潔に言おう起動させちまったのだ。男であるはずの俺が。それと同時に胸元が一瞬光り輝いた。

当たり前のように捕縛。政府の力で自宅軟禁状態を余儀なくされた。しかし俺はそんなことよりもっと別のものの事で頭がいっぱいになっていた。

（なぜあんな所で光ったんだ？）

俺は常に持っているものがある。葬式の時に祖母ちゃんから貰った祖父ちゃんのペンダントだ。

それのペンダントトップは、シルバーの網の中に５ｃｍ程のクリスタルが入ってるようなデザインだ。

それをくれるときに祖母ちゃんから言われたことを思い出した。

『お前さんにこれをやろう。祖父さんの形見だから大事にするんだよ。』

ここまでは、普通だった。

『これが光ったときは、触っていた武器が、これからお前さんの運命の武器になるだろうね。』

何を言ってるの？まだ葬式中なのに。

『もしものときだよ。もしもそのようなことがあれば、それを離してはダメだよ。』

再び両親の職場。

今回は、俺の隣には両親。政府のお偉いさん方も揃っている。

クリスタルの話しを両親にした。祖母ちゃんも入ってくれた。

そいつが必要なんだ。っと一言。流石に信じてはくれなかったが、もう一度会うことを許してくれた。

目の前には以前と同じようにそいつがいる。

「久しぶりだな。前の事が本当ならもう一度見せ付けてくれよ。」

再び光りに包まれた。

男が二人だけ？　Ｐａｒｔ１（前書き）

原作どうりにある程度進めたいと思っています。

男が二人だけ？　Ｐａｒｔ１

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲはじめますよー」
黒板の前でにっこりと微笑んでいる女性教師は、山田真耶先生。副担任だそうだ。（さっき自己紹介をしてくれた。）
身長は目測であるが少し低いようだ。だいたい生徒と変わりが無い程度に。それにしても服がダボッとしているし、かけている黒縁メガネもやや大きめのようで、若干ズレている。
全体的に言うと、『大人ものを無理して身につけた子供』的な不自然さがある。そこは、もう気にしないでおこう。
「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……。」
異様な緊張感が漂う教室に、彼女の一言は消えていった。
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
ちょっとうろたえている副担任が可愛そうだから少しくらい反応をしてあげたいが、そこまでの余裕が無い。
なぜか。
教室の中に男子は二人しかいない。後は女子なのだから。

今日は高校の入学式。新しい門出であり、むしろ喜ばしい日だ。
問題は、男が俺以外に男子は一人しかいないことだ。
（きつい、きつすぎる。）
自信過剰と思われたくないのだがほぼ全員からの視線を感じる。
彼とは席が若干離れている。彼からすると窓側斜め後方となるわけだが。それだからか、前方の生徒がたまに見てきたりする。とても

しんどい。
目の前の席に、視線を持って行く。
「……。」
薄情な元居候の篠ノ之箒は、窓の外を見ている。約二年ぶりの再開なのだが、嫌われたか？斜め前の彼もすがるように箒を見ていた。知り合いか。
「……織斑くん、織斑一夏くん。」
「は、はい。」
すっかり忘れていたが、自己紹介の途中だった。
織斑一夏、俺以外の唯一の男だ。
後ろを振り返り、
「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」
その言葉の後、儀礼的に頭を下げた。それでいいだろうと思ったが、周囲の連中がそれを許さないようだ。
それは、この直後の俺を案じているようだった。
彼はこのまま動きそうもないから、回想の続きといこうか。
結局、俺はお偉いさん方の前で歩き回ったり空中停止などをやってのけていつの間にか、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）をいつの間にか終わらされて打鉄にベルト状のモノが出来ていてバックルに形見のあの石が、埋め込まれて入れ込まれたになってしまった。
自分の専用機を持ってしまったわけで、再び捕縛というか本格的に軟禁となってしまった。
時は進み二月。有り難いことに織斑一夏が受験会場で動かしてくれた事で彼の報道を各社ビックニュースとした。そのおかげでゆっくりとすることが出来た。
「以上です」
多分考えたが何も出なかったのだろう。
がたたっ。思わずずっこけた女子が何人かいた。俺は正解だと思う特にいいたい事がなければ。
パアンッ！いつの間にか彼の後方に黒のスーツにタイトスカートで

すらりと背の高い女性教員がいた。
「げえっ、関羽！？」
パアンッ！また叩かれている。それにしても叩かれすぎではないか？
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
トーンの低めの声。目つきも鋭い。
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてしまってすまなかったな」
彼への対応とは一変優しい声になった。
「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」
先ほどの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応えている。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者にはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」
なんと！自己紹介で恐怖政治発言！
しかし、周囲の女子からは困惑した俺と異なり黄色い声援が響いた。
「キャ――――――！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした。」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」
きゃいきゃいと騒ぐ女子達を、織斑先生はうっとうしそうな顔で見ている。
「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」
織斑千冬。彼女は第一世代型ＩＳの操縦者であり、第一回（モンド・グロッソ）ＩＳ世界大会にて総合優勝および格闘部門優勝の結果を残している。そこら

にいる女子が慕うわけだ。
しかし、いつの間にか引退してしまった。そこまで競技のほうには興味が無いから知らないが。
「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして！」
ちなみにだが、彼女は「ブリュンヒルデ」と呼ばれている。モンド・グロッソで総合優勝したからだそうだ。
「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」
「いや、千冬姉、俺は――」
パアンッ！本日三度目。よく叩くねこの人は。
「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」
――そういうことなのだろう。つまり――
「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」
そう言うことであろう。
「それじゃあ、男で『ＩＳ』を使えるのも、それが関係して……」
「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」
最後のを聞かなかった事にして、改めて言っておく。
俺達二人は今、世界で二人だけの『ＩＳ』を使える男としてここ、公立ＩＳ学園にいる。
ＩＳ学園とは、ＩＳ運用協定に基づいたＩＳ操縦者を育成する教育機関だ。ここの資金源はすべて日本国が持つことになっている。そしてこの施設にかかわる問題や事故は協定に参加している国に説明がしっかり出来るように日本国は公平に介入しなければならない。その割には学園内にて得られた技術は、協定に参加している国に公開しなければならず、それらの国の国籍を持っている人は、無条件に入学の機会を与えることや、それらの人の日本での生活を保証しなければならない。
ひど過ぎやしないか日本への対応が。

まあ、今この一国民で特に力もない少年が、なんやかんやいっても世界が変わるわけがないが……。
しかし、俺には少し気になることがある。俺はＩＳ関連施設で、織斑はＩＳ学園の試験会場で、ＩＳを動かしたからここにいるわけなのだが。俺は仕方がないかもだけど、一夏は何でそんな所にいたんだ？後で聞いておくか。
「……くん。玉森海瑠くん」
「は、はい」
やばい、まだ自己紹介してない。
「全くここにいる男どもは、ぼっとしてるな」
織斑先生からは、ため息混じりの呆れたような声が出てきた。
「はい、すみません。すぅ。玉森海瑠です。これからよろしくお願いします。」
儀礼的に頭を下げて上げて座る。織斑のように物足りないような視線を受けたが、無視した。
残りの自己紹介も終え、ＳＨＲも終わった。他の人の自己紹介か？自分の事でいっぱいで耳に入らなかったよ。

男が二人だけ？　Ｐａｒｔ２

斜め前で男子生徒が潰れて、目の前では元居候が難しい顔をしながら考え込んでいる。
今は一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わった休み時間。しかし、この教室には異様な雰囲気に包まれている。
とりあえず言っておくが、ＩＳ学園ではコマ限界までＩＳ関連授業を入れている関係上、入学式当日から普通に授業がある。学内の案内なんかはない。地図を見ろだそうだ。
「よっ、箒。久しぶりだね。一年間半ぶりかな？」
初めに声をかけやすい目の前の元居候に肩を叩きつつ声をかけた。
「っわぁ！！な、なんだ、お前か。いきなり声をかけるな、びっくりするだろう！！」
元居候の驚いた声は、クラスに響いた。相変わらずの男のような口調だ。
彼女の名前は、《篠ノ之箒》。とある大人の事情とやらで短い間ではあったが、俺の家に一緒にすんでいたヤツだ。髪型は一貫してポニーテール。髪なんか肩下までいっている。
身長は平均的なのだがどこか長身を思わせる。スタイルがいいのだろうか？
「あ、ゴメン。とりあえず、久しぶりだから挨拶をっと思ったんだけど……」
「そ、そうか……」
「前に話してた『離れ離れになっちゃった幼なじみ』って、あそこでへたってる人でしょ」
「……あ、ああ」
顔を下げて難しい顔をしている。

「僕も声をかけたかったから、一緒に来てくれるかな？」
「な、なんで私も……」「長い間あってなかったんでしょ。ほら、行くよ。」
箒の腕を掴む、つーかこのあほ、立とうとしない。しゃーない、この手を使うか。
「織斑一夏！！暇なら少し話さないか！？」
教室全体に聞こえるんじゃないかと思えるほどの声。そこにいる全員に聞こえるほどの声。
「ああ、いいぜ。少し待ってくれ。」
反応あり。更に来てくれることになった。箒、逃げるなよ。
「玉森海瑠です、初めまして。海瑠って気軽に呼んで」
「ああ、俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ」
挨拶に握手をした。男は俺達二人だけだから仲良くしなきゃな。
「……わ、私もいる」
後ろから声がした。間違えなく箒のものなのだが、弱気過ぎやしないか？
「おう、箒。久しぶりだな」
「そ、そうだな」
「六年ぶりだけど、箒ってすぐにわかったぞ」
「え……」
六年も離れててすぐにわかるなんてそうそう無いぞ。女の子だから体も代わるだろうし。
「よ、よくも覚えているものだな……」
「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」
「……」
箒は一夏をおもいっきり睨みやがった。なにか地雷を踏んだみたいだ。俺も気をつけよう。
キーンコーンカーンコーン。
二時間目の開始のチャイムがなった。廊下にいた生徒はもうほとんどいなくなっている。さすがＩＳ操縦者行動が俊敏だ。

「一夏、僕達も席につかないとね。」
「ああ、じゃあ後で。」
まあ、それでも遅かったらしい。理由は……
パアンッ！パアンッ！
俺と一夏が、織斑先生の一撃を喰らったから。
「とっとと席に着け、馬鹿者ども」
「……は、はい」
「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」
スゲー痛かった。

「ちょっとよろしくて？」
「へ？」
「え？」
二時間目の休み時間がはじまって、一夏と話そうとした時、知らない声に素っ頓狂な声を出してしまった。へ、二時間目のこと？授業は辛かったよ。教科書五冊が詰まれて、取り合えず山田先生の話を横目で聞きながら、すべてに目を通して、現時点で意味がわからないところを線で引いたりしてた。
その間には、一夏が電話帳みたいな入学前の参考書を古い電話帳と間違えて捨ててたのが判明。本日五発目を喰らったわけで……メモ帳の正が一つ出来た。
そして、山田先生は山田先生で妄想から帰還でき無くなりかけて、楽しいくらいに大変だった。
回想はここらにしておいて、声をかけてきたのは地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通るようなブルーの瞳が、ややつり上がっている状態で俺達を見ていた。何でこう話し掛けて来るヤツは不機嫌そうなのかね？
わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴なオーラを出していて、

彼女の雰囲気も今の女子をたいげんしている感じだ。
今の世の中、ＩＳのせいで女性はかなり優遇されている。優遇を通り越して女＝偉いの構図まで出来てしまった。そうなると男の立場は完全に労働力ということとなる。今では町ですれ違っただけの女にパシリにされる男の姿は珍しいものではない。
そしてここにはそのような現代っ子がいるわけで、腰に当てた手が様になっている様子から、彼女自体もかなりな身分なのかも知れない。
「訊いてます？お返事は？」
「あ、ああ。訊いてるけど……どういうようだ？」
「訊いてるよ、なに？」
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないのでしょうか？」
「「……」」
しらねーよそんなもん。こういうやつは、いつになっても慣れられない。
「悪いな。俺、君が誰か知らないし」
「まあ！」
一夏の言葉をきいて彼女は声をあげた。
「ゴメン。僕も全く」
俺の口からも彼女が満足する言葉は出なかったようだ。
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしを！？」
尋ねなくてもよかったみたいだ。セシリア・オルコットか……、面倒臭さそうだが悪いヤツではなさそうだな。とりあえず自己紹介っと。
「初めまして。玉森か……。」
「知ってますわ！！」
さいですか。

「まぁ、いいや。よろしくね。」
「……」来たよ。なんだよその身分の違いをわきまえろみたいな視線は。
「あ、質問いいか？」
「ふん。下々の要求に応えるのも貴族の勤めですわ。よろしくてよ」
「代表候補生ってなに？」
がたたたっ。わぁー、吉本新喜劇みたいにみんなこけた。
「あ、あ、あ……」
「『あ』？」
「ハァー。」
「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」
やっぱりキレるよな。彼女達代表候補生は、地位画一のために日々精進していると聞くし。
「おう、知らん」
織斑一夏。君はもう少し表意文字の特性を理解すべきだ。
「……」
しかし、何事も一周すれば落ち着くようで、彼女は、頭を押さえながらぶつぶつと言いはじめた。
面白そうだ。みてみよう。
「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、ここまで未開の地なのかしら……」
「ああ、なんだ、呆れただけなんだ……。一夏。代表候補生って言うのは、国家代表のＩＳ操縦者の候補者にあたる人達なんだよ。その国の中で選ばれた人ってわけだね」
「ああ、なるほどな」
彼は天然なのか？
「そう！エリートなのですわ！」
あ、彼女が復活をした。なんでだ？……ああ、『選ばれた人』＝『エリート』、ととったわけか。
「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

るだけで奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少しは理解していただける？」
「そうか。それはラッキーだ」
「まあ、そうだね」
笑顔で同意。
「……馬鹿にしていますの？」
ああ、だって俺はあんたに興味は無いし。
「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」
そりゃどうも、期待はしないが。
「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
自慢話のところ残念だが……。
「入試って、あれか？ＩＳを動かして戦うってやつ？」
「それ以外に入試などありませんわ」
「あれ？俺も倒したぞ、教官」
「は……？」
あぁ、可愛そうに。相当ショックなのかセシリアは目を見開いている。
「わ、わたくしだけと聞きましたが？あ、あなたは？」
教官を倒していないことを願うように俺に訊ねてきた。答えは決まっている。
「ごめん。僕も倒したはずだよ、教官は」
ピシッと変な音がした気がする。ガラスにヒビが入るときみたいな……
「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」
「えぇっと、多分」
「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」
「ねぇ、とりあえず落ち着こうよ。しんこきゅ――」

「こ、これが落ち着いていられ――」
キーンコーンカーンコーン。
セシリアの言葉を封じたのは、チャイムだった。昼休みや放課後でなくてよかった。いつまで続くか知ったもんじゃない。
「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」
こういう人ほどめんどくさいと理解した。

男が二人だけ？　Ｐａｒｔ３

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
さてと、休み時間の事はなかったものとして授業に集中しよう。
現在三時間目、教壇に立っているのは織斑先生。山田先生は、端のほうでノートを持っている。
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
ふと、気がついたように織斑先生が話を始める。
「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会が開く議会や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス代表戦は、入学時点での実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」
とりあえず、めんどくさいものはパスだ。目立たないようにしよう。
「はい、織斑くんを推薦します！」
「私もそれが良いと思います！」
「僕も織斑くんが良いと思います！」
こんなもんで完璧だろう。一夏はしっかりしてるみたいだし、もし困ることがあれば手伝ってやろう……っと思う。
「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」
「お、俺！？」
立ち上がって異議を唱えているが逆に一夏の印象が強くなってるだろう。
「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」
「自薦他薦は問わないといった。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」
「い、いやでも――」
彼の言葉は、突然の甲高い声が遮った。
「待ってください！納得がいきませんわ！」
バンッと机を叩いて立ち上がったのは、あの五月蝿い金髪だった。
えぇっと、セシリアなんだっけ？
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」
そうそう、セシリア・オルコット。なんか面白いから見てよ。
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」
俺ら日本から見ればイギリスなんか極西の島国だがな。そうみれば島国のところは、代わり映えしないな。
「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」
おぅ、この雰囲気は面白そうになりそうだ。セシリアもエンジンが暖まってきたみたいだしな。
「大体、文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」
「なっ……！？」
自分の国の痛いところをつかれて彼女は顔を真っ赤にして怒ってしまった。さてと、どうする気かな？一夏は。
「あっ、あっ、あなたねえ！イギリスにだっておいしい料理はあり

ますわ。わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
ちなみにだが、イギリスは他のヨーロッパ諸国よりも美食文化とやらは発達しなかったらしい。
「決闘ですわ！」
バンッと机を叩くセシリア。見ている身としては面白い。
「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」
「言っておきますけれど、わざと負けたりしたら男のあなたたちを小間使い――いや、奴隷にしますわよ」
「っは？待って、何で僕も入ってるの？」
「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」
「だ・か・ら、僕を条件に抜いて話してよ！」
「そう？何せちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくしセシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」
ダメだ、あいつら熱が上がって俺の声が聞こえてない。
「ハンデはどのくらいつける？」
急に一夏の声のテンションが下がった。
「あら、早速お願いかしら？」
「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」
一夏がこう言うと、クラスからドッと爆笑が巻き起こった。
「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」
「男が女よりも強かったのって、大昔の話だよ？」
「織斑くんは、それは確かにＩＳを使えるかもしれないけど、それは言いすぎだよ」
みんな笑っていやがる。しかも何も知らないつい数時間前に会ったヤツを、俺の頭の中でピシッと何が切れたような嫌な音がした気がした。
ダンッ。
セシリアが机を叩くよりも強い音が教室をこだます。
「今一夏を笑ったヤツら！！てめェらふざけるな！！まだ何も知らねェヤツをよく笑えるなァ！！てめェら、まだあいつがＩＳを使っ

て戦ったところを見てねェだろが！！一夏は、一夏だ！！一人の人間としてみろォ！！俺達が男だからって性差別をするな！！」
そこまで言って気がついたときには……静かにはなったが、ちらほら泣いてるヤツがいる。ああ、やり過ぎたようだ。
「すみませんでした、二人の話に首を突っ込んで。どうぞ進めてください」
とりあえず謝って座る。
しかしひどく印象を悪くしたようだ。
「何？あの人、不良？」
「大丈夫、大丈夫だよ。織斑くんはあんなに暴力的じゃないよ」
「ヒックヒッ……そうだよね」
「あの人、一体何者のつもり？男でＩＳを使えるからって、いい気になりすぎだよ！」
だそうだ。俺は外では『僕』と言って話し方も丁寧にしている。それは女子から無駄に喧嘩を買わないように荒い口調を押さえるためでもあったわけだが、家の中なり親族のみのときやさっきみたいにキレたときにはどうしても出てしまうのだ。
パンパン。
手を叩くようなが聞こえる。
「静かにしろ。織斑、オルコット。ハンデの事をしっかり決めろ。」
織斑先生が鎮めてくれた。感謝感謝だ。
「あと玉森。自分の意見を言うのは勝手にしてもいいが、騒ぎを作るな。私が面倒だ。」
はい、すみません。以後気をつけます。

「はぁ……」
放課後には、机で酷い顔をしてだれていた俺がいた。
一夏の周りにはある程度の間隔をとって女子が近付いて来るのだが、

俺には逆に離れていく。っていうか逃げていく。学食でもざわざわと噂になっていた。女の情報網は怖いな。
唯一近付いてきたのは、俺の幼なじみで違うクラスにいた北川ひよりくらいで……あれの紹介はおいおいにさせてくれ。精神的に疲れた。ついでにそいつは、彼女の友人に心配そうに引っ張られて俺の前から消えた。結局散々な一日だった。
さてと、こう言うときにうってつけの言葉がある。ご存知の方もおられるだろう。では、さんはい　――

「不幸だぁ……。」

「ああ、織斑くんに玉森くん。二人ともまだ教室にいたんですね。よかったです」
「はい？」
「えっ？」
呼ばれて顔を上げると、片手に書類を持った山田先生がいた。
「お話がありますので、玉森くんもこちらに来て下さい」
「あ、はい」
はて、俺は何か悪いことをしたであろうか？
「えっとですね、寮の部屋が決まりました」
そういって部屋の番号の書かれた紙とキーを渡してきた。
はっきり言って、これからどうしていけばいいか悩んでいる時に渡されてもピンと来ない。
「俺の部屋、きまってないんじゃなかったんですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」
「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処理として部屋割を無理矢理変更したらしいです。……二人とも、その辺りの事って政府から聞いています？」
最後のほうは耳打ちだ。
そして政府とは、日本政府。自分でもどうしてそんな大それた機関

と関係を持っているのかは、今でも信じられない。
遺伝子工学の学者まで俺に会いにきた。学者とはいつ見ても酷い存在だと思うよ、俺も言えた義理じゃないが『是非とも生体を調べさせてくれないか？』っててめぇら馬鹿じゃねェのか。そんな危なっかしい謳い文句に首を縦に降るわけがねえ。
「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れることを最優先にしたみたいです。一ヶ月もすれば部屋が用意できますから、しばらくは二人とも相部屋で我慢してください」
「……あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが……」
一夏、人は秘密の話をしたいときは耳打ちをするものだぜ。
「あっ、いやっ、これはそのっ、別にわざととかではなくてですねっ……！」
「落ち着いてください、わかってますから。それでも、荷物の準備とかで一度戻らないとですし、今日はこれで帰っていいですか？」
俺もそうだが一夏だって……
「織斑のは私が手配してやった。玉森もお前の両親に頼んでやった。ありがたく思え」
凄みのある声……、織斑先生だ。
「ど、どうもありがとうございます……」
「ありがとうございます……」
織斑先生は、一夏に入れてきたものを言っていた。
「じゃあ、二人とも時間を見て部屋に行ってくださいね。夕飯は六時から七時、寮の一年用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど大浴場もあります。学年ごとに使える時間は違いますけれど……えっと、その、二人とも今のところは使えません」
「「え、何でですか？」」
俺、大浴場入りたいよ。
「アホかお前らは。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいの

か？」
「あー……」
「はぁー……」
そういえは男子は俺達二人だけか。
「お、織斑くんと玉森くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だ、ダメですよ！」
「い、いや、入りたくないです」
「イヤです」
特に『イヤ』を強調して言った。そんな事したらどんな目に遭うかわかったものか。
「ええっ？女の子に興味ないんですか！？そ、それはそれで問題のような……」
この人は、話を聞いていないのだろうか？
まあ、紆余曲折あり、先生達は会議があるとのことで行ってしまった。
山田先生、『道草くっちゃダメですよ』ってそこまでも体力はありませんが……。とりあえず行くか、部屋に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1182y/

ＩＳ ―過去より受け継がれし霊石（いし)―

2011年11月21日17時06分発行